

# 富士山クリーンボランティア活動参加者の環境配慮行動について ～富士山登山者と比較して～

岡田 勇知 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 中野 友博

キーワード：環境ボランティア活動，環境配慮行動，環境配慮行動評価

## 1. 序論

近年，人間が自然を破壊することで環境変化が問題視されている．世界文化遺産で登録されている富士山でもごみ問題が深刻化している．世界自然遺産で登録されるはずの自然豊かな富士山が，人の手によって汚染され富士山の自然の価値が失われている．ごみの不法投棄やポイ捨などの身勝手な行動で元々住んでいた動物にも悪影響を与えていることは許されることではない．汚すことは簡単にできるが壊された生態系はすぐに元には戻らない．世界自然遺産に登録されるためには人々の普段からごみに対する意識，行動を変えないといけない．著者は，この問題を解決するため，環境保全を活動目的に掲げている民間の環境 NPO 団体に着目した．

そこで本研究では，富士山クリーンボランティア参加者の普段の日常生活の環境配慮行動について明らかにすることを目的とする．

## 2. 研究方法

【調査対象】2016年8月27日に富士河口湖にて実施された富士山クリーンボランティア参加者計32名とした．2016年8月27日，8月28日に，富士山の御殿場口5合目で富士山登山者56名を比較群とした．

【調査用紙】

1)太田が作成した環境配慮行動に関する調査用紙24項目の中から16項目2因子(環境配慮行動,環境配慮行動評価)を使用した．

2)追加項目として富士山クリーンボランティア参加者の属性に関する項目を5項目,環境に対する意識についての自由記述4項目を作成した．富士山登山者の属性に関する項目を5項目,環境に対する意識についての自由記述3項目を作成した．

## 3. 結果と考察

富士山クリーンボランティア参加者と富士山登山者の環境配慮行動と環境配慮行動評価(実行可能感因子,負担感因子,規範感因子)の合計得点の平均値と標準偏差を算出し, t 検定の結果を表1に示す．

環境配慮行動は富士山登山者に比べて富士山クリーンボランティア参加者が有意に高かった( $t=7695, p<.01$ )．富士山クリーンボランティア参加者は，富士山クリーンボランティア以外の環境ボランティア活動に参加している人が多く，実際に環境が破壊されている所を目の当たりにしていることから，環境を大切にしたいという思いが強いから，環境に配慮した行動ができていると考える．

環境配慮行動評価の負担感因子は，富士山登

山者と比較すると富士山クリーンボランティア参加者が有意に高かった( $t=8.361, p<.01$ )．自由記述から富士山クリーンボランティア参加者は紙を再利用するなどの簡単にできることでなく，環境に良いものを使ったり，自然環境を楽しみ環境に負荷を与えない生活をしていることがわかることから負担感が高いと考えられる．

環境配慮行動評価の規範感因子は，富士山登山者に比べて富士山クリーンボランティア参加者が有意に高かった( $t=3.833, p<.01$ )．質問項目で見ると「人はボランティア活動する必要があると思う」という規範感項目の得点が富士山登山者と比較すると，富士山クリーンボランティア参加者の方が他の項目と比べ高い．富士山クリーンボランティア参加者はボランティア活動を経験しているため，自然環境がどのように破壊されているのか理解しているため，規範感が高くなったと考える．

表1 富士山クリーンボランティア参加者と富士山登山者の比較

富士山クリーンボランティア参加者 n=32 M(SD)	富士山登山者 n=56 M(SD)	値

\*\*p<.01

## 4. まとめ

1)富士山クリーンボランティア参加者の環境配慮行動は，富士山登山者より有意に高いことがわかった．環境配慮行動を高めるには，環境ボランティアに参加し自然環境が破壊されていることを知ることで，環境を大切にすることをきっかけをつくるのが大切だと考える．

2)今後の課題として，本研究では，登山者の山岳環境配慮行動についての尺度のため，環境ボランティア用ではない．より環境ボランティアに適した尺度の検討を行う必要がある．調査対象者が少なかったため男女比などの属性で研究することができなかった．研究をより信頼性のあるものにするため，調査対象者数を増やす必要がある．

## 5. 引用・参考文献

- 1)富士山クラブ，環境 NPO 特定認定非営利活動法人，「富士山クラブとは」  
<http://www.fujisan.or.jp> (2016年11月10日閲覧)
- 2)太田和利 (2007) 登山者の山岳環境配慮行動の規定因について-南アルプス・仙丈小屋における登山者意識調査から-，野外教育研究, 第10巻第2号, pp. 1-12.